

学校教育目標		「確かな学力と豊かな心をもち、たくましく生きる児童の育成」		a ミッション		「コミュニティ・スクールを基盤とした小中連携教育の深化」		a ビジョン		「学校と地域が連携し、子供の未来を拓く学校」		自己評価		外部評価		学校関係者評価		進育計画	
b 中期経営目標		c 短期経営目標		d 目標達成のための方策		e 評価指標		f 目標達成率		g 達成率		h 結果と課題の説明		i 自己評価		j コメント		k 改善案	
学力的向上	主体的に学び続ける児童の育成	基礎学力の向上		<ul style="list-style-type: none"> 国語科、算数科における「深める」「振り返る」学習過程の工夫（PDCAWサイクルを活用した授業改善） 思考力の育成を目指した指導と評価の一体化 	<ul style="list-style-type: none"> 国語科・算数科における単元末及び学期末テストの平均正答率（％） 	100%	【全体】 国81% 算76% 1年国85.2% 算85% 2年国71% 算76.6% 3年国85% 算80.6% 4年国81% 算79% 5年国82% 算73% 6年国77% 算63%	【全体】 国84.9% 算79.0% 1年国85.2% 算87.1% 2年国83.7% 算69.7% 3年国87.6% 算87.0% 4年国85.6% 算80.3% 5年国81.3% 算73.8% 6年国86.2% 算76.0%	【全体】 国101.2% 算93.0% 1年国94.3% 算96.8% 2年国93% 算77.4% 3年国103% 算102% 4年国107% 算94.5% 5年国102% 算92.3% 6年国108% 算95%	B	<ul style="list-style-type: none"> 【結果】 思考力や活用力を意識したプレテストの実施、授業改善を通して、平均正答率の向上が図られた。 指導と評価の一体化に向けて、単元ごとに付けさせたいかや指導方法、結果の分析を各学年で行うことができた。 全学級で研究授業を行い、「深める」「振り返る」学習過程の工夫の共有と、改善方法について協議し、日々の授業での授業改善につなげることができた。 【課題】 思考力・活用力を意識した教方の工夫・改善やテスト対策が手探りであった。引き続き授業改善が必要である。 標準的なテストより平均点が低くなるため、点数による以外の達成感を児童が感じられるような評価や、価値付けが必要である。 	イ	○	○	ハ	<ul style="list-style-type: none"> 授業改善の取組が進んでいることを評価する。評価にあたっては、途中の評価、形成的評価の導入も工夫してほしい。 学力向上部会を通して、学力向上について小中の共通認識をもち、更なる授業改善が進展することを期待する。 参観日で授業を拝見したが、準備をしっかりと、工夫していることも分かった。いろいろな取組がされていると思う。 単元ごとに付けさせたいかや指導方法は考えるべきだと思う。 課題は必ず残るが学校全体でチームとして取り組んでほしい。 研究資料の算数の成績がよくない。特に、4～6年生は学年を追うごとに低下している。このことから、授業の在り方をしっかりと分析してほしい。今のままでいいけないことは明らかである。 2年生の算数が少し気になるが、全体的に数値が上がっていることから成果が出ていると思う。様々なことに「どうして？」という疑問をもつ習慣が一つと一つと伸びていく。 課題にもあるように思考力や活用力は点数化以外の評価が難しいが、これから国際的な未来の社会へ飛躍する等のためにも一番大切な要素だと思う。引き続き書きをおいて協議してほしい。 園々に寄り添った苦手つぶしができる環境を更に充実させていけたらとても良いと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 効果が見え始めているため、活用力を問う評価テストの使用と、プレテストの実施等の手立てを継続し、4月からすぐに行えるように体制を整える。 個別学習の時間を時程の変更等を行うことにより、確保し、30%未満の児童のつまづきをなくすることができるようにする。 授業展開・問題把握の時間を意識した授業改善の取り組み、「何が問われているのか」を的確に捉えることができるようにする。 		
		地域との連携		<ul style="list-style-type: none"> 「くんぐんタイム」実施（月：6校時1・2年） 「個別指導」の実施（第1・3金：全学年） 	<ul style="list-style-type: none"> 標準学力テストの正答率（％） （今年度の市平均に対する本校平均の割合） 	100%以上	【全体】 国65.4% 算66.4% 1年国66.9% 算78.7% 2年国65.6% 算66.6% 3年国66.8% 算74.5% 4年国66.6% 算63.5% 5年国61.0% 算64.6% 6年国65.2% 算60.2%	【全体】 国93.9% 算92.6% 1年国90.3% 算93.6% 2年国90.2% 算92.9% 3年国101.5% 算102.9% 4年国96.4% 算91.1% 5年国91.2% 算82.4% 6年国97.2% 算87.9% ※6年生は全国平均と比較	B	<ul style="list-style-type: none"> 【結果】 3年生のみ市平均を上回った。 特に低学年では、国語科の正答率が低く、高学年では算数科の正答率が低い。 どの学年も国語科「書くこと」の領域、算数科の記述式の問題において正答率が低い。 【課題】 調査分析を行うと、正答率の低い学年では特に、問題後半につれて無回答率が大きく上昇していく傾向が共通している。文章読解や問題把握の速度を向上させることが必要である。 領域からみると、自分の考えや思考過程を書き表すことに課題がある。 	イ	○	○	ハ					
生徒指導の充実	心身ともに成長しようとする児童の育成	基本的な生活習慣の定着		<ul style="list-style-type: none"> 【挨拶】 児童会を中心とした挨拶の習慣化への取組 学校と地域が協働する挨拶運動の実施 	<ul style="list-style-type: none"> 【挨拶】 児童アンケート（肯定的評価の割合） 	80%	【全体84.5%】 1年84.0% 2年82.0% 3年93.0% 4年78.0% 5年76.8% 6年93.0%	【全体84.8%】 1年87.2% 2年76.7% 3年89.6% 4年90.9% 5年86.7% 6年77.4%	105.0%	A	<ul style="list-style-type: none"> 【結果】 児童アンケートの結果の肯定的評価の割合は7月と比べて微増であった。 挨拶運動を実施した結果、自分から大きな声で挨拶をする児童が増えたという実感はある。 小中合同の挨拶運動は新型コロナウイルス感染症の影響で例年よりは規模を縮小しての実施となった。 【課題】 挨拶運動のみならず、日常的な挨拶指導に関する取組を考えていく必要がある。 中学校が近いという立地を活かし、小学生と中学生が共に進んで挨拶をしていくという雰囲気作りが必要である。 	イ	○	○	ハ	<ul style="list-style-type: none"> 児童一人ひとりの自発性・自主性を尊重し、習慣化・日常化すればよい。 評価にあたっては、他者評価も取り入れ、多面的な評価が工夫されるとよいと思う。 挨拶については、まずは大人が率先してすべきと考える。引き続き挨拶運動に取り組むたい。 地域での挨拶は良くできている。 挨拶の評価は高い。 子供の方から挨拶してくるケースは少ないが、こちらから先にするとは大半は返してくれる。大人が率先して挨拶をすることを心掛けることで、挨拶の習慣化を図りたい。 挨拶運動でアンケート結果を評価するのは甘くなる。生活習慣の定着を図るのに挨拶から指標を変えてみてはどうか。 地域でも挨拶を通して児童が増えたと思う。子供達の日を見て挨拶を返すようにしている。返事が返ってきたと喜び子供もこれが明るい地域につながると嬉しくなる。 挨拶運動はコロナ禍でも地域を明るくしてくれた取組であったと感じる。更に心がけよう挨拶を教員・保護者・地域一丸で大人の姿勢としても示していきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> あいさつリーの取組は「皆で取り組んだ感」があって良かった。 子供同士の挨拶が少ないことやふらふらした時に挨拶ができていないことが多いので、習慣化に向け、継続的な取組が必要である。 		
		自己有用感の向上		<ul style="list-style-type: none"> 【時間】 始業時刻の厳守のための5分前行動 	<ul style="list-style-type: none"> 【時間】 児童アンケート（肯定的評価の割合） 	80%	【全体73.9%】 1年77.0% 2年46.8% 3年61.9% 4年80.5% 5年62.4% 6年88.0%	【全体70.5%】 1年67.4% 2年69.8% 3年75.7% 4年73.6% 5年67.4% 6年69.0%	92.4%	B	<ul style="list-style-type: none"> 【結果】 目標値を達成することができなかった。 肯定的評価の割合が7月と比べて微減した。 【課題】 年度当初に目指すべき姿を教職員で共有していたが、やり切る指導が不十分であった。 担任に依存する指導ではなく、児童会活動などを関連させた指導を検討する必要がある。 	イ	○	○	ハ	<ul style="list-style-type: none"> ただ時間を守ることを目標にするのではなく、どうして時間を守る必要があるのか理解させていくことも有効だと思う。 5分前の行動は、よくできていると思う。 学習の時間については、柔軟でよいと思う。 なぜ5分前に行動しなければならないのか単目の行動をさせることで、何が良くなるのかを考えて評価指標を立てること、アンケート項目が変わり子供が寝る。 評価を守ることは動機を育てることにつながると思う。新学期から比較するとどうしてもだれてしまっていると思う。次の新学期でまた新たな気持ちで取り組みたいと思う。 挨拶で成果をあげた手法や校内放送等、工夫の余地はあるように思う。 	<ul style="list-style-type: none"> めざす姿を明確にする必要がある。年度当初に周知しておくべきである。 委員会等を積極的に活用していく。 		
自立し協働できる児童の育成	主体的な育成	主体性の育成		<ul style="list-style-type: none"> 【目標の設定】 ロングタイム（40分間）の計画の実施 本課日 縦割りの組遊び・学級遊び・集会活動等 校内ボランティア活動 小中合同地域貢献活動 【活動の振り返り】 児童の「自己有用感振り返りシート」の記入 【教職員による児童の見取り】 「自己有用感振り返りシート」の取組の見取りと共有を確実に行う。（年間2回） 	<ul style="list-style-type: none"> 【自己有用感】 児童アンケート 「自分の役割や責任を果たすこと、自分ができることを見つけて、他人の役に立つこと」の肯定的評価の割合 	80%	【全体86.6%】 1年100.0% 2年91.5% 3年92.9% 4年81.5% 5年67.4% 6年86.0%	【全体85.6%】 1年99.2% 2年77.4% 3年92.6% 4年85.1% 5年74.9% 6年84.6%	108.0%	A	<ul style="list-style-type: none"> 【結果】 児童アンケートでは目標値を上回ることができた。 教員間での交流により、普段見えない児童の姿を交流することができた。 児童との面談の際に、児童の行動を評価する一助となった。 【課題】 「自己有用感振り返りシート」に記入する時期や枠の大きさなどについて改善する必要があると感じた。 どう活用しているのか、どう学んでいるのかを児童にも理解できるように仕組みが必要である。 小中合同地域貢献活動では、雨天の場合の代替案をもっておくべきであった。 	イ	○	○	ハ	<ul style="list-style-type: none"> 児童一人ひとりがより多く有用感・肯定感をもてるような「場づくり」を引き続き工夫してほしい。 縦割り班による企画をもっと実施して「協働する力」を身につけさせたいと思った。 自分の役割と自分の責任を果たす子供になってほしい。 さらに主体的に考える児童になるよう願う。 A評価になっているので、評価や教員自身の見直しが必要。 自己有用感を生きていく上でとても大切なことである。是非、アンケートを続けてほしい。 貢献活動は中止の場合であっても、計画すること自体で学べることもあると思う。 縦割り班遊びは、向東の伝統としても良いと感じる。児童が主体的に人と関わりコミュニケーションの工夫ができる場面の設定は貴重である。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己有用感振り返りシートが低学年から高学年まで同じであり、使いにくい学年もあった。 マンネリ化してしまっていること多い、感じた時にすぐ書くことも難しくなった。 良い点が言い合えるような関係性を作っていくことが重要である。 		
		地域と共につなぐ児童の育成		<ul style="list-style-type: none"> つなぐ地域がとりの ・地域の特色を生かした授業や地域とつながる授業の実施（各学年が設定した学びの場：生活科・総合的な学習の時間等） 	<ul style="list-style-type: none"> 児童アンケート（地域の方と学んで満足感を得た児童の割合） 地域ボランティアアンケート（地域ボランティアによって、児童への指導にやりがいを感じた割合） 	80%	児童95.5% 地域100%	児童97.9% 地域96.4%	児童122.4% 地域120.5%	A	<ul style="list-style-type: none"> 【結果】 <地域ボランティアの人数> 9月～1月の5ヶ月で、延べ382名の方にお世話になった。（くんぐんタイム・個別指導・クラブ活動・MOA・総合的な学習の時間G・併科教室等） <児童：アンケート> 上半期同様、どの学年も、「地域の人から学ぶことは楽しい。」「地域の人から色々なことが学べた。」「専門的なことが学べた。」「できなかったことができたようになった。」等、学びに対する満足度は高く、充実した学びにつながっている。（低学年）「優しく教えてくれる。」「褒めてくれるのが嬉しかった。」「等、学習意欲や自己肯定感につながる感想も多い。 （中学年）ガストティーチャーの方への感謝の思いや新しく知った喜びといった感想が多い。（高学年）クラブ活動での感想が多く、「丁寧に教えてくれる。」「とても分かりやすい。」等の専門的なことを教えてくれる喜びが多かった。 <地域ボランティア・ガストティーチャー：アンケート> 上半期同様、地域ボランティア・ガストティーチャーは、児童への指導にやりがいを感じている。児童が、意欲的に活動を行うことがやりがいにつながっている。児童に対して「一生懸命に学習をしてくれている。」「もっと教えてあげたい。」「もっと指導の時間がほしい。」「という前向きな意見や充実感が感じられる意見が多かった。 	イ	○	○	ハ	<ul style="list-style-type: none"> 学校として、何をどこまでして欲しいのか、また通達して欲しいのか明示される方がよいと思う。例えば、クラブ活動支援の地域ボランティアの更なる充実等。 ガストティーチャー制度は、とてもよい企画である。今後もいろいろな職種の保護者に参加してもらえばよいと思う。 地域とつながる授業は実施すべきだと思う。 地域とのつながりをこれからも大切にしていきたい。 子供達も地域の方も喜んでおり、とても良い活動だと思う。 自分の子供の頃もそうだったが、普段の授業ではなくガストティーチャーや地域の人と接する授業は楽しいと感じるし、記憶に残ると思う。今後も更に進めてほしい。 子供に生きて働く力を培うのに、地域とのつながりの中で学ぶことは良いことである。総合的な学習の時間の見直しをしてほしい。 地域行事が減少している中、学校での取組により地域住民と子供達がつながりをもつことができるとも良いと思う。 上半期同様、地域ボランティア・ガストティーチャーは、児童への指導にやりがいを感じている。児童が、意欲的に活動を行うことがやりがいにつながっている。児童に対して「一生懸命に学習をしてくれている。」「もっと教えてあげたい。」「もっと指導の時間がほしい。」「という前向きな意見や充実感が感じられる意見が多かった。 	<ul style="list-style-type: none"> くんぐんタイム、個別指導は、児童の実態に応じて取組の見直しを図る。（回数・内容・日程等） クラブ活動、教科等におけるガストティーチャー等、引き続き地域と協働した取組を行い、専門的な技能等を学んだり、学びを広げ深めたりしていく。 生活科や総合的な学習の時間は、次年度に向けた計画の見直しを行う。 児童アンケートは、めあてにつながる質問項目を入れ、内容の充実を図る。 		
進育計画	地域と共につなぐ児童の育成	情報発信		<ul style="list-style-type: none"> コミュニティ・スクールの取組に係る保護者、地域への発信（CSだより・HP・学級懇談会・入学説明会等） コミュニティ・スクールだより年間4回以上発行（小中学校の取組内容を発信） 学校便りにコミュニティ・スクールに係る取組の掲載 	<ul style="list-style-type: none"> 「学校の活動に協力したい」と回答をした保護者・地域の割合 	80%	「保護者・地域へのアンケート調査は、昨年度と同様12月に実施予定のため、評価は行っていない。	86.8%	108.5%	A	<ul style="list-style-type: none"> 【結果】 「できることなら協力したい」という保護者の割合が86.8%であった。保護者の多くは、学校の活動に協力したいという思いをもたれている。 【課題】 「学校の活動に協力したい」といった保護者の思いを踏まえ、学校として、どのように保護者・地域の方のご協力をいただき、生かしていくのか。 	イ	○	○	ハ	<ul style="list-style-type: none"> 広報活動に対する工夫・努力は高く評価する。現状の回覧状況を踏まえた工夫は必要である。 「協力したい」という保護者が86%もいるのであれば、学校行事に保護者を巻き込むという方法もあると思う。 コミュニティ・スクールとは地域の人も関わりが深くなってきているのではないか。 子供、保護者、地域の人で情報伝達手段が全く違うので大変だと思う。 できる人は協力したいという人は多いが、実際に協力をお願いした時にできる人がどれだけの人は疑問である。実際にどういったことをお願いし、協力できるのかを考えていく必要がある。 CSとしての認知度が上がってきた。今後は、CSの指定校で良かったと思わせる取組が必要である。 学校に出向いてボランティアに取り組むこともあれば、地域で子供達をきり気なく見守ることもあるというように、できることをするというスタンスでいいのではないかとと思う。 向東の保護者の協力的な心が書きやりになっている感がある。迅速に保護者からの協力体制を作りなおす必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校便りやコミュニティスクール便り等を通じて、小中連携教育の取組を更に発信していく。 引き続き、児童に何ができるか、地域にどんなことができるのかといった地域のために主体的に行動できる力を育てていく。 次年度に向けて、保護者・地域の方に、何をどのように協力をしていただくか、教育活動を充実させていくのかを検討する。 		

【自己評価 評価】
 A：100≦（目標達成）
 B：80≦（ほぼ達成）<100
 C：60≦（もう少し）<80
 D：（できていない）<60

【外部評価】 イ：自己評価は適正である。 ○：自己評価は適正でない。 ハ：わからない。